

鍋島と古九谷 —意匠の系譜—展

2018年10月5日(金)～12月22日(土)

展覧会趣旨

古美術の世界で“日本の三大色絵磁器”のひとつとして、時代を超えて愛され続ける鍋島焼。その良質なコレクションで知られる戸栗美術館で、2年半振りに鍋島焼展を開催いたします。

戸栗美術館では過去にも鍋島焼展を開催してまいりましたが、今回は当館では初めての試みとして、同じく“日本の三大色絵磁器”に数えられる「古九谷」をはじめとした17世紀中期の伊万里焼との意匠の繋がりに焦点を当てます。

初出展品を含む約80点を展覧いたします。

開催情報

展覧会概要

会期：2018年10月5日(金)～12月22日(土)
会場：戸栗美術館
所在地：東京都渋谷区松濤 1-11-3
開館時間：10:00～17:00（入館受付は16:30まで）
※毎週金曜日は10:00～20:00（入館受付は19:30まで）
休館日：月曜日
※10月8日（月・祝）は開館、10月9日（火）は休館。
※毎月第4月曜日はフリートークデーとして開館。
入館料：一般1,000円/高大生700円/小中生400円（団体20名様以上で200円割引）
※10月14日（日）は当館創設者 戸栗亨のメモリアルデーのため、無料観覧日となります。
交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分、京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分
※当館には駐車場・駐輪場はありません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

美術館概要

戸栗美術館は、創設者 戸栗亨が長年に渡り蒐集した陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島家屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および、中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体であり、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



展示解説

当館学芸員による展示解説を行います。

- 予約不要（入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください）
- 第2・第4水曜 14:00～15:00
(10/10 10/24 11/14 11/28 12/12)
- 第2・第4土曜 11:00～12:00
(10/13 10/27 11/10 11/24 12/8 12/22)
- メモリアルデー 11:00～12:00 14:00～15:00
(10/14)

フリートークデー

展示室でお話しをしながらご鑑賞いただける日です。

- 毎月第4月曜日（10/22 11/26）
- 10:00～17:00（入館受付は16:30まで）

30分間のミニ展示解説も開催。

- ミニ展示解説 14:00～14:30
- 予約不要（入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください）

とぐりの学芸員講座

当館学芸員による深くやきものを学ぶ講座です。

- 2018年10月29日（月）14:00～黒沢愛（GM/学芸員）
「鍋島焼入門」
- 2018年12月3日（月）14:00～黒沢愛（GM/学芸員）
「伊万里焼と江戸の食文化」
- 各回90分程度
- 参加費1000円（入館券を別途お求め下さい）
- 先着35名様
- お電話にてお申し込みください（03-3465-0070）

メモリアルデー

当館創設者 戸栗亨を偲び、
無料観覧日といたします。

- 10月14日（日）10:00～17:00
- 11:00～と14:00～の2回、当館学芸員による展示解説を行います（予約不要。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください）

次回
展示 初期伊万里
—大陸への憧憬—展



2019年1月8日(火)～3月24日(日)

展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館
広報担当 宛
〒150-0046 東京都渋谷区松濤 1-11-3
TEL：03-3465-0070 FAX：03-3467-9813
URL：http://www.toguri-museum.or.jp/
E-mail：kouhou@toguri-museum.or.jp



展覧会詳細

古九谷様式の時代にあたる 17 世紀中期の佐賀・有田では、成形や絵付けなどの技術革新が進みました。そして生み出されたのは、大胆な配色と構図の色絵や、より鮮やかな発色となった染付、土型を駆使した薄造りの変形小皿など、器形や装飾、意匠も斬新な伊万里焼でした。しかし、17 世紀後半に入ると、有田では次第に海外輸出に主眼を置くようになり、むしろ、その気風を受け継いだのは、伊万里焼から分かれるようにして始まった、伊万里・大川内山（おおかわちやま）にて焼造される鍋島焼でした。佐賀鍋島藩による徳川将軍家への献上のために創出され、幕閣や大名などへの贈答品としても用いられたという鍋島焼は、有田から集められた優秀な職人たちによって製作され、高い品格と卓越した技術によって、現代においても日本磁器の最高峰と名高いやきものです。ただし、鍋島焼に用いられている成形や絵付けの技術、そして意匠は 17 世紀中期の有田に始まったものも多く、当時の技術革新を無くして、鍋島焼は成立しなかったと言っても過言ではないでしょう。鍋島焼と古九谷様式をはじめとした 17 世紀中期の伊万里焼、約 80 点によって繰り広げられる、美の競演をご堪能ください。

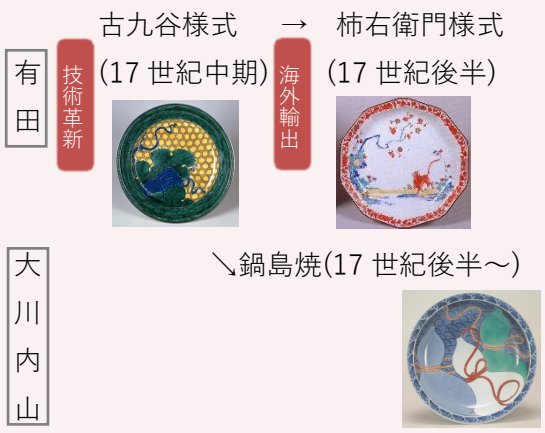
【展示構成】
器種ごとに鍋島と古九谷を並べてご紹介いたします。
第 1 室 古九谷様式と鍋島様式 小皿 台鉢 猪口
第 2 室 中・大皿 青磁

《古九谷様式とは》

伊万里焼色絵の一様式で、17 世紀中期に作られた。大胆な色遣いや構図、濃厚な色彩が特徴。「古九谷」とも呼ばれる。

《伊万里焼とは》

17 世紀初頭に佐賀・有田で誕生した日本初の国産磁器。当初は朝鮮半島の製磁技術をもとに製作されたが、17 世紀中期に中国・景德鎮の技術が流入し、技術革新が生じた。17 世紀後半に西欧への海外輸出が本格化すると、柿右衛門（かきえもん）様式へと移行する。



《鍋島焼とは》

17 世紀後半から萌芽が見られ、17 世紀末から 18 世紀初頭に盛期を迎える、非常に精緻なつくりの磁器。皿類に代表される、深い見込に高い高台のつく木盃形や、櫛目をはじめとした高台文様、三方に配した花唐草や七宝などの裏文様、染付を基調とした絵付けなどが「鍋島様式」の特徴とされる。



貸出画像

作品①～⑤の写真データ等をご用意しております。ご掲載の際は、別紙写真借用申請書をお送りください。



①色絵 瓜文 皿

伊万里（古九谷様式）
江戸時代（17 世紀中期）
口径 44.5cm
見込に細かい丸文と花文を並べ、黄彩を重ねて地文様とし、主題となる大振りの瓜を上絵の青と緑で鮮やかに描き出した大皿。周囲は流水文をめぐらせ、緑彩をのせる。上絵の発色も良好で、密に描きこんだ意匠や大胆な文様構成からも、古九谷様式大皿の名品と言える。



②染付 樹下群鶏文 手鉢

伊万里
江戸時代（17 世紀中期）
口径 21.8cm
平底の手鉢。側壁に一段設け、把手も Y 字状にするなど、造形に工夫が見られる。見込には丸文を配した幾何学文、花木と鶏、遠景に飛雁、把手には花唐草文を、丁寧な線描と、濃淡を違えた塗りつぶしで細やかに描く。青色も鮮やかに発色し、17 世紀中期の確かな技術力があらわれた優品。



③色絵 三瓢文 皿

鍋島
江戸時代（17 世紀末～18 世紀初）
口径 20.5cm
見込に三つの瓢箪を描き、背景には墨弾き（すみはじき）と呼ばれる白抜きの技法で青海波文をあらわした皿。鐺縁状の口縁にも墨弾きによる規則正しい波濤文をめぐらせている。青・緑の瓢箪は塗りつぶしのムラもなく、職人の高い技術力がうかがえる鍋島焼の名品。



初出展品

④染付 人参文 皿

鍋島
江戸時代（17 世紀末～18 世紀初）
口径 14.8cm
見込に人参を散らして描いた五寸皿。人参の豊かな葉を、染付による青色の濃淡を微妙に変えた繊細な描法で見事にあらわす。塗りつぶしによる背景の水色も美しい仕上がり。何気ない野菜類を主題としても、鍋島焼ならではの文様構成力と技術力によって品良くまとめている。



⑤色絵 唐花文 八角猪口

鍋島
江戸時代（17 世紀末～18 世紀初）
高 6.8cm
鍋島焼には皿類のほか、猪口や香炉なども見られる。本作は轆轤（ろくろ）成形後、土型に押し当て端正な八角とした猪口。外側面に牡丹風の花を意匠化した唐花文を描く。二客を見比べてもほぼ違いはなく、精緻な造形や絵付けに組食器としての高い完成度があらわれている。



展覧会紹介文

展覧会紹介の要約が必要な場合は以下の文章をご参照ください。

■22word

鍋島と古九谷の意匠の繋がりに着目した展覧会。

■47word

鍋島と古九谷を器種ごとに展示し、その意匠の繋がりを紹介する展覧会。初出展品を含む約 80 点を展観。

■136word

古九谷様式の時代にあたる 17 世紀中期、佐賀・有田では技術革新により斬新な伊万里焼が誕生。その技術革新があつてこそ成立したのが、献上品たる鍋島焼でした。鍋島焼と古九谷様式をはじめとした 17 世紀中期の伊万里焼を器種ごとに展示し、その繋がりを紹介します。初出展品を含む約 80 点を展観。